

我が国の看護系大学における倫理教育の現状と課題

—過去5年間の先行研究の文献検討より—(資料)

新井 龍

滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座

要旨

看護系大学は2006年に146校に増加しているものの、倫理教育について大学教育独自の教授方法、教授する時期について研究は少ない。そのため今回大学教育における倫理教育の現状を把握するために、過去の文献より検討することとした。医学中央雑誌 web 版にて「看護教育」「倫理」「大学」をキーワードとし研究者の属性を教育機関(大学)に限定し検索した結果、29の文献を得た。その内、対象が学生であった文献16件を対象に文献検討を行った。文献検討により得られた結果として、看護倫理教育に関する研究は学生の倫理的問題に対する意識の調査を行っている段階であること、学年によって倫理的問題が異なること、倫理教育の教育方法について研究の蓄積が少ないことが明らかとなった。大学教育における看護倫理教育は一つの講義・授業にて完結するものでなく、一般教養など多くの知識を踏まえた上で、倫理的問題を考える際、学生がより多くの視点を持てるよう教授する必要がある。

キーワード 看護教育 倫理 大学

はじめに

看護師は専門職として、国際看護師協会が「看護師の倫理綱領」を1953年に採択し2005年改訂している。日本看護協会も「看護者の倫理綱領」を1988年に策定し2003年に改訂している¹⁾。そして倫理教育についても2004年文部科学省より「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告書「看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標」により、倫理の教育方法と評価が具体的に示され、今後の課題として提案されている。しかし現在、看護倫理という言葉自体が不明瞭なまま、共通理解に至っていないことが指摘している²⁾。また、大学において、看護倫理学についての教育は教授方法、内容、実施する時期など明確にされておらず³⁾、大学・教員によって看護倫理の捉え方がさまざまであり、教育方法も手探り状態であると指摘されている⁴⁾。本来、倫理・道徳を考えたときに、その背景には歴史、社会学、哲学、文化人類学、宗教学など多様な基礎知識が必要であることも報告している⁵⁾⁶⁾。

看護倫理教育は、一つの科目で完結するものではなく、看護教育全体に通底する問題であると考えられる。それは看護自体、本質的に倫理的であることが要求される営みであるためである。看護は、人間関係を基盤とし、安全安楽を提供するために、常に相対的な倫理上の判断が繰り返される倫理実践過程であるとしている⁷⁾。

そのため、1990年以降急激に増加している看護系大学において⁸⁾、大学教育としての看護倫理教育を実施する時

期、教授方法を確立することは急務であると考えられる。今まで大学教育における看護倫理教育の独自性を研究した文献は少なかった。よって今回、今後の看護倫理教育の教授方法・教授する適切な時期を確立するために過去の文献より、看護系大学における倫理教育の現状と課題について検討した。

研究目的

文献から我が国の看護系大学の倫理教育の現状を明らかにする。

言葉の操作上の定義

看護倫理：看護職者としての行動規範である職業倫理と、個人の看護観からなるもの⁹⁾。

看護倫理教育：看護実践における人間らしさを実現させる倫理の概念を形成させ、発展・深化させること²⁾。

研究方法

1. 対象

医学中央雑誌 web 版 Ver. 4にて、「看護教育」「倫理」「大学」をキーワードとする文献のうち、2001年～2006年に、研究者の所属が教育機関(大学)であり、研究対象が学生であった文献を対象とした。

2. 調査期間

2006年11～12月

3. 分析方法

本研究では、大学教育における看護倫理教育の現状を把握するために、学生に対しどの時期に看護倫理教育を実施し、どのような方法であったかを分析する。また、2001年以降の看護倫理教育の研究の蓄積を把握するために文献の数について検討する。よって、「研究文献数」「調査した学生の時期」を分析項目とし、「調査した学生の時期」については学生のレディネスや臨地実習を考慮し、1・2年次と3・4年次に分けて内容の分析をした。

結果・考察

1. 研究文献数

医学中央雑誌 web 版にて「看護教育」「倫理」をキーワードとし、原著論文、抄録ありにて検索をした結果 130 件であった。「看護教育」「倫理」「大学」をキーワードとした結果では 96 件であった。96 件の中に大学病院付属の専門学校対象の文献が含まれていたため、研究者の属性を教育機関(大学)に限定した。その結果、研究者が教育機関(大学)の文献は 29 件であり、学生を対象とした文献は 16 件、教員を対象とした文献 6 件、文献検討は 7 件であった。

対象とした文献の掲載年度で見ると、2001 年～2002 年は対象となる文献は存在せず、原著論文以外の報告、解説または短期大学・専門学校の原著論文のみであった。研究者の属性が研究機関(大学)であった文献は 2003 年 4 件、2004 年 7 件、2005 年 13 件、2006 年 5 件と増加傾向にあった。

「看護」「倫理」をキーワードとする文献は 2001 年に年間 24 件であったが、2003 年には 64 件となり 2005 年には 106 件となり関心が高まっていることが伺える。内容は研究倫理、個人情報保護、看護教育、出生前診断、延命治療、急性期看護、終末期看護など多岐に渡る。これらは医療技術の進歩、経済構造の変化や医療制度の改革、患者の権利意識の向上など医療を取り巻く環境の変化が大きく影響を与えていると考えられる。また、臨床の看護師にも今までの業務だけでなく患者の権利を擁護者としての存在価値も見出されたことも、看護倫理への関心が高まったことも要因であると考えられる。

そして看護系大学は 1997 年に 52 校、2006 年には 146 校に増加し、卒業者数も 1327 名から 8091 名へ増加している。また、2005 年には大学院修士課程も 80 校を超え増加している。そのような中、研究機関(大学)における看護倫理を対象とした研究は、大学設置数や倫理全体の研究の伸び率よりも少ない傾向にあった。

2. 調査した学生の時期

研究機関(大学)における学生を対象とした文献 16 件の

うち 8 件が、実習の中で学生が感じ取った倫理的問題に対する質問調査、面接をするものであった。8 件のうち、基礎看護学実習を対象とした文献は 1 件のみであり、臨地実習(成人・老年看護実習・演習)を対象とした文献は 6 件であった。残り 1 件は全学年を対象としたアンケートであった。

臨地実習を対象としていない文献は 7 件であった。その内、学生の倫理観を横断的に調査したものは 6 文献、縦断的に学生の倫理観の変化を調査したものは 1 文献のみであった。アンケート結果も踏まえ、1・2年次と3・4年次に分けて考察する。

1) 1・2年次

1・2年次の基礎看護学実習において学生が捉えた倫理的問題として、プライバシーの保護やケアの個別性など個人の尊厳の保護について倫理的問題意識を持ち、医療従事者としての立場より患者やその家族側としての立場から捉えている傾向があった。しかし、学生の知識・技術の不足によって臨床で起こっている倫理的問題に気がつかないという記述も見られた¹⁰⁾。

1・2年生が持つ道徳性は、コールバーグ理論「慣習的水準：法と秩序の維持」の第 4 段階に位置していたこと¹¹⁾から、法など社会的ルールを守ることは善とされているものの、自律し個人の尊厳を重視することや、法や規則は状況によっては変えられるという思考にまで発達していないと考えられた。また、周囲との和を大切に、人間関係が原因で、理想のケアを提供できない葛藤があるという記述が見られた⁴⁾。この問題を考えるとき、個人の権利の尊重だけでなく、日本には「世間」¹²⁾という独自の文化背景があることも考慮しなければならない。個人主義が中心の西欧文化を取り入れた倫理観でなく、日本独自の周囲との人間関係を重んじる文化があるという歴史的な社会背景の教育も今後の倫理教育に必要であると考える。

2) 3・4年次

3・4年次の学生対象の文献では、1・2年次同様に日常生活援助の際に倫理的問題を見出す記述があった¹³⁾。また学生は急性期看護実習の中において、患者を取り巻く環境についての配慮なども倫理的問題意識として挙げていた¹⁴⁾。4年次になると臨地実習を終えていること、倫理学、看護管理の授業を修了していることもあり医療者側からの視点として、家族への配慮などに関する倫理的問題意識を挙げていた¹⁵⁾。しかし学生は、カンファレンス後に倫理的に問題であると理解していても対応策を明確に示すことが出来ていなかった。実際にどのように行動するかまでは考察できておらず困惑していた¹³⁾。この問題は、今まで経験した受身的な講義や授業の学習形態

が要因になっているためと考えられる。受身的な姿勢ではなく、自分からどのように行動するかを考えるためには、参加型の授業や、具体的な事例を用いたグループ討議、臨地実習における臨床指導者や教員へのロールモデル行動¹⁶⁾が重要になると考えられる。

また、看護大学生が倫理的課題に対する認知と行動は経年的に変化し、その要因として授業や実習、実体験の影響が強いとしている¹⁷⁾¹⁸⁾。「倫理観、道徳観は教育よりも実体験から培われる」ことを踏まえ、学生の実体験を取り入れた看護倫理教育¹⁷⁾が必要であると考えられた。

今回対象とした文献では、教育方法を検討したものはグループワークの有効性を検討していた1件のみであった¹⁹⁾。しかし、16件全ての文献において看護倫理教育を行うためには、倫理的問題を体験させる必要性を示唆していた。これは先行研究でも得られたように、臨地実習による体験を看護倫理教育に活かすことが考えられる。しかし、臨地実習を対象とした文献では、実習期間中だけの指導にとどまらず、事前に倫理的問題意識を持って臨地実習に臨むこと、臨地実習終了後に学生同士で話し合い学びを共有することも提言されていた。看護教育学における臨地実習は授業形態の一つと定義されており³⁾、講義や演習と連携し科学的根拠に基づいた知識を提供する場である。そのため独立した学科目とならず、習得した知識・技術を統合する場である。実習で生じた現象全てが教材であり、学習目標達成を目指す授業とされている。看護倫理教育においても、臨地実習や一科目の講義にて完結するものではないため、今後はより多くの領域において、講義のさい看護倫理を意識した教授が必要になると考えられる。また、看護倫理は社会・時代背景に大きく左右されるため、学生が常に正しいかどうかを考えることができるような指導²⁾が必要であると考えられる。そのため、看護倫理教育は一科目のみの検証ではなく、他の講義・授業との連携がどのようになっているかを検討していく必要が示唆される。

結論

我が国の看護系大学における倫理教育の文献検討を実施した結果、以下の現状が明らかとなった。

- 1) 学生の倫理的問題意識を調査する研究が16件中15件であった。
- 2) 1・2年次の学生は知識不足の中、今までの経験から倫理的問題について考察していた。
- 3) 3・4年次において知識は増加し倫理的問題に敏感になるが、実際にどのように問題を解決するか明確に示せず困惑していた。
- 4) 看護倫理教育の教授方法についての研究は1件のみであった。

現在、大学教育における倫理教育に関する研究は、文部科学省の2004年「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告書において提言されているものの、学生の倫理的問題意識の調査が中心であった。そのため大学教育における看護倫理の教育についての研究を発展させる必要がある。そして、倫理的問題を考える際、看護学や臨地実習の体験だけでなく、一般教養の知識を踏まえ、患者を全人的に、より多面的な視点から理解することが必要である。より多くの視点を学生に持たせ、看護実践には常に倫理的な問題が存在することを教授することが、大学教育において倫理教育の課題であると考えられた。

文献

- 1) 監修 社団法人日本看護協会：新版 看護者の基本的責務一定義・概念/基本法/倫理一. 42-53, 日本看護協会出版会, 東京, 2006.
- 2) 稲葉佳江：看護倫理教育の課題とその内容構成の試み. 教授学の探求 18, 145-157, 2001.
- 3) 杉森みどり, 舟島なをみ：看護教育学 第4版. 472-484, 医学書院, 東京, 2005.
- 4) 田口玲子, 渡辺岸子, 尾崎フサ子：「看護における倫理的問題」に対する看護学生の認識(その2)意思決定に影響を及ぼす価値の対立に焦点を当てて. 新潟大学医学部保険学科紀要, 8(2), 31-39, 2006.
- 5) 大谷藤郎：医の倫理と人権—共に生きる社会へ—. 82-89, 医療文化社, 東京, 2005.
- 6) 永田まなみ, 柗中智恵子, 千場直美：日本における看護哲学の確立に向けての基礎的研究—この10年間の医学中央雑誌 web 版によるキーワード検索に基づく考察—。熊本大学医学部保健学科紀要, 1, 27-38, 2005.
- 7) 大日向輝美：看護倫理教育における歴史性・社会性の問題. 91-108, 教授学の探求, 21, 2004
- 8) 監修 看護問題研究会：平成 18 年看護関係統計資料集. 116-167, 日本看護協会出版会, 2006.
- 9) 山田聡子, 波多野梗子, 小野寺杜紀：実習場面における看護倫理教育に関する研究(第2報)—倫理的問題別指導者の認識内容とその比較—. 日本看護学教育学会誌, 9(3), 1-13, 1999
- 10) 佐藤友美：看護学生が捉えた倫理的問題—基礎看護学実習の体験の中で—. 日本看護科学会誌, 25(3), 92-95, 2005.
- 11) 堀口雅美, 大日向輝美, 木口幸子, 田野英里香, 福良薫, 稲葉佳江：本学看護学科1・2年次学生の道徳的推論. 札幌医科大学保健医療学部紀要, 7, 97-104, 2004.
- 12) 阿部謹也：世間とは何か. 講談社現代新書, 東京, 1995.
- 13) 小野光美, 浅井さおり, 原祥子, 沼本教子：老人看護学実習における倫理的問題の関する学習内容の分

- 析. 神戸市看護大学紀要, 9, 75-84, 2005.
- 14) 佐藤ゆかり, 内藤明子, 山口千秋: クリティカルケア実習における学生内容の検討 実習記録とアンケートの分析から.
愛知医科大学看護学部紀要, 3, 57-71, 2004.
- 15) 遠藤みどり, 中込洋美: 周手術期看護の演習終了後における学生の学び 倫理的視点からの内容分析.
山梨県立看護大学紀要, 7, 51-62, 2005.
- 16) 村上みち子: いま、考えてほしい倫理の問題 看護学教員の倫理的行動.
臨床看護, 32, (5), 777-782, 2006.
- 17) 木下里美, 小野寺杜紀, 藤原恭子: 倫理的課題に対する看護大学生の認知と行動 4年間の経年的変化と影響要因. 埼玉県立大学紀要, 5, 125-132, 2004.
- 18) 藤原恭子, 小野寺杜紀, 木下里美: 看護大学生の倫理的思考に関する検討—1年生と4年生との比較—. 埼玉県立大学紀要, 6, 39-46, 2004.
- 19) 本吉美也子: 看護学生の学習の取り組みに影響する要因の研究.
札幌医科大学保健医療学部紀要, 7, 55 - 61, 2004.